

# 生きる意味

関西創価高等学校 一年  
榎本 あおば

「障がい者なんていなくなればいい」「障がい者は不幸をばらまく存在」理由もなくつけつけ放しになっていたテレビからこんな言葉が聞こえてきた。ある障がい者施設で起きた殺人事件の容疑者の供述であった。私は頭を強く殴られたような衝撃を受けるとともに心を深くえぐられるような感覚に襲われた。

私の祖父は障がい者等級一級のいわゆる重度障がい者だ。脳梗塞を発症し、一時は危篤の状態まで陥ったが、なんとか命をつなぐことができた。しかし、後遺症として言語障がいや右半身の麻痺が残ってしまった。五文字程度までの短い単語なら、後に続いて発することができ、ほとんど会話はできない。歩くことや立つことすらできず、寝るとき以外はずっと車椅子に座って時間を過ごす。もちろん自力で寝たり起き上がることもできない。自力では生活がままならないのだ。

最近、祖父がまだ元気だった時のことをよく思い返す。祖父母の家は名古屋にあり、私が住んでいる神戸から車に乗っているというところが嬉しくて嬉しくてたまらなかった。また、祖父の命が一生懸命生きようと叫んでいるのだから私を感じた。ほぼ一日中車椅子に座っているだけの祖父であるが、その祖父の姿を見るたびに私も頑張るって生きようと思わされる。

人の存在価値はその人の能力では決まらない。その人の存在そのものが最も尊く、周りの人の生きる希望になっていると私は思う。赤ちゃんだってそうである。ごはんは食べさせてもらう。おむつもかえてもらう。何かあると泣きわめく。でも、その存在は周りを明るく照らし、笑顔にする。しかし、人々はそのことを忘れてしまう。それは、世の中が相対的評価であふれているからだと思う。成績や業績で人々は評価され、その評価が良い人が社会的に認められていき、優位に立つ。反対に悪いと見下されたりしてひどい扱いを受けることもある。そのような相対的評価を気にするあまり、自己嫌悪に陥って悩み、苦しんでいる人も多いだろう。私も実際にそうである。私は中学二年生の頃に体調を崩し、学校に通えない期間が長くあった。授業に参加できず、自力で勉強はしていたものの、限界があり、不安でいっぱいだった。勉強もまともにできず、両親や先生にも迷惑をかけてばかりの自分には存在価値などないのではないかと思うこともあった。そんな私に生きる意味を教えてください。

で三時間程かかる。学校の長期休みに遊びに行った時にはいつも「よく来たね。」と迎え入れてくれた。お風呂から上がったときには大きなお腹を叩いて笑わせてくれるのがお決まりだった。スーパーで買って帰って美味しいねと言いながら食べた、熱々の鯛焼きの味。近所の駄菓子屋で買って帰った、たくさんのお菓子。一緒に庭で花火をしたり、動物園や水族館に行ったり…。祖父がつい昨日まで元気だったかのように鮮明に記憶が蘇ってくる。今の祖父には不可能なことばかりである。でも、そんな祖父を嫌いにはならない。「いなくなればいい」とか「不幸だ」などとは思わない。むしろ祖父は私に生きる希望を与えてくれる。

祖父が危篤の状態だと知った時、正直私は祖父とはもう会えないのかもしれないと思った。なんとか生きてほしい、それだけだった。大きな後遺症が残り、前のように遊んだり、話すことすらできないと知った時、もちろんショックはあった。でも、それ以上に祖父が生きてくれた祖父の姿だった。祖父は語らずして私を励ましてくれたのだ。

障がいがあるとかないとか、何ができるかできないかで人の存在価値は決まらない。その人にはその人にしかない生き方、使命が必ずある。それを尊重し合える社会ができたらいいな。いや、私達が作っていかなければならぬのだと思う。

## ろう者と聴者の関わり

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等学校二年

奥田 梨世

私は、家族全員が耳の聞こえない「ろう者」である、デフファミリーの下で生まれた。そのため、手話でコミュニケーションをとるのが当たり前だった。耳が聞こえる「聴者」は、私と違って異質な存在であり、私とは異なる「聴者世界」で暮らす外国人のような存在だと認識していた。

私は小学生の頃、地元のバスケットボールクラブに所属しており、聴者と頻繁に交流する機会があった。ろう者とは手話で会話できるが、聴者とは筆談で話すため、コミュニケーションが上手くいかず、居心地が良くないことが多かった。その当時の私は語彙力がほとんどなかったため、自分の伝えたいことを思うように表現できなかった。そして消極的な性格で集団に入るのが困難で苦手だった。

聴者同士で楽しげに声で会話している様子を見て、私こそが「差異な人」なんだと痛感するとともに、疎外感や排除感に心が痛んだ忍耐力のない私にとっては耐え話することができた」と、嬉しく飛び跳ねたい気分になり、私は耳が聞こえないが、聴者も同じ世界を生きているんだと希望を持つことができた。

高校二年生の夏休みに、アメリカに短期留学した。初めての留学で、不安や恐怖を勝手に感じていた。聴者とは英語で筆談したが、身振りでも通じることが多かった。アメリカは多様な人が住んでいるので、様々な人とのコミュニケーションに慣れていると感じた。「I'm Deaf」という一言を伝えれば、ろう者であることを一瞬で伝えることができ、親切に対応してくれた。留学先では、ろう者に対して偏見や先入観がなく、差別を受けることは一度もなかった。アメリカでは自分をアピールして、お互いに尊重し合うという考え方が根本にあることを感じた。そうした社会観に感銘を受け、自己肯定感が自然と高められ、聾者である自分を包み隠さず、貫いていこうと考えるようになった。

このような経験から、聴者への恐怖感や抵抗感がなくなった。さらにもっと関係を作りたいと意欲が湧いていく。今はInstagramなどのSNSを通じて、聴者とビデオ通話をしたりチャットをしたりして、この世界で生きる喜びを感じている。

聴者がマジョリティである社会で生活する以上、聴者と接する機会を避けることは不可能である。この社会で

難しく、バスケットボールクラブを辞めてしまった。中学では、陸上部に入部した。顧問の先生は私と同じろう者だったが、聴者と交流するのがとても上手で、自分にはないコミュニケーション能力を持っていた。その先生は聴者と、できる限り関わりたくないと考えた臆病な私に対して、「聴者と仲良くしろ」「ろう者も聴者と対等な立場なのだから、恐れるな」と何回も言ってくれた。

陸上の大会では、招集場所に直接行って、審判員のコールに応じなければならぬ。耳の聞こえない私が「声をかけてくれ」と、審判員にお願しても、審判員は忙しかったため特別扱いしてもらうことは難しい。そこで、勇気を振り絞って、近くにいる聴者の選手に「すみません、あなたは何組ですか?」と、拙い字で書いたメモ紙を見せて尋ねた。その人は「あっ、私は〇組ですよ」とペンで私のメモ帳に丁寧に書いてくれた。私の聴覚障害を受け入れてくれたかのように感じた。「意外と簡単に聴者と生きていくためには、聴者と少しずつでも接していくことは大きな意味があると学んだ。身体的な差異は確かにあり、それを聴者に完全に理解してもらうことは難しいが、抵抗感を取り除くことはできる。今でも、聴覚障害者に対して、可哀想という見方や、どのように対応するのか分からない、ろう者と会ったことがない、といった聴者もあり、ろう者は聴者社会から孤立しがちである。

このような社会を変えていくためには、私たちろう者が積極的に社会参加して、聴者と交流する機会を持つ必要があると考える。そして、ろう者との接し方を伝え、偏見をなくしていかなければならない。

私たちろう者は手話でコミュニケーションするため、ろう者の社会はストレスのないコンフォートゾーンである。しかし、そこから抜け出し、ストレッチゾーンである聴者の社会に飛び込むことで、多角的な視野が得られる、この社会で生きていくために必要な力を得ることができると思う。そうすることで、自分を変えていくのではなく、進化させていくことができるだろう。どのような人でも、自分の個性や才能を開花できる社会にしていきたい。

# 障害と付き合っていくとどうなるか

茨城県立水戸聾学校 三年

高橋 みき

私は聴覚障害をもっています。障害をもっていると必要になるのが合理的配慮です。

今、私は聾学校の高等部に通っています。高校生になる前は、地元の中学校に通っていました。そんな私が聴覚障害をもっていると本当の意味で自覚したのは遅く、中学生の時でした。

小学生の時、私は会話に入れず孤立してしまったり、指示通りに動けなかったりしていました。それを私は、自分がだらしなからだと、自分が悪いのだと思っていました。補聴器を着ければ他の友達と同じになるのだと勘違いしていたのです。そして、私はだんだんと自分から動いたり、発言したりすることができなくなっていました。常にお手本がないと不安になってしまつたのです。そして、小学校を卒業し中学生になり、初めての部活動が始まりました。私はバレーボール部に所属しました。この部活動で初めて聴覚障害という壁にぶつかることとなります。バレーボールという競技は、試合中の

聞いてくれ、その時だけではなく、その後も配慮をしてくれたのです。近くの席の友達が私の聞こえについて質問をしてくれました。それがとても嬉しいと思いました。声に出して伝えれば耳を傾けてくれるのだと感じて、それが私にとってはとても救いになりました。とても温かい気持ちになったのです。

それだけではなく、障害について友達に説明をしてしばらくしてから、学年主任の先生から文化祭で手話を使ったパフォーマンスができないかと相談がありました。私の学校の文化祭では毎年合唱を行います。三年生全クラスで、それぞれ合唱発表の前に曲に込めた思いや曲の紹介を、手話と口話を使って皆で一言ずつするのはどうかという提案でした。そこで発表する内容に私が手話をつけ、皆に教えてほしいとのことでした。先生から相談を受けた時はとても迷いました。何故なら当時の私は家族以外の人と手話を使って会話をした経験がほとんどなく、また私自身、人前に出ることが得意ではなかったからです。しかし、最後にはやることに決めました。手話に興味をもってもらえた事が嬉しかったからです。そして、迎えた本番では皆で息を合わせ、発表を終えることができました。大きな達成感を味わうことができました。このような貴重な体験ができたのは、勇気を出して障害について話すことができたからだと思えます。

コミュニケーションがとても大事となる競技です。しかし、私は試合中の声かけが聞き取れませんでした。そのため人とぶつかってしまったり、ボールを取りに行くことができなかったりしてしまいました。皆本気で取り組んでいたのに、険悪な雰囲気になってしまつこともありました。試合中だけではなく、普段の練習中でも先生の指示が、ボールのはねる音などにかき消されてしまい、聞き取れないということがありました。ここで私は初めて自分以外の皆の聞こえ方に疑問をもちました。どのくらい聞こえるものなのか友達や先生に質問しました。そうして初めて自分の聴覚障害について深く考えることができたのです。生涯ずっと付きまとう障害についてとても不安に思い、怖いと感じました。

そこで当時通っていた聾学校の通級の先生に相談しました。友達に私の障害について話したらどうかと先生から提案がありました。私はその提案を受けて、話すことを決めました。最初は不安でしたが、友達は皆真剣にコミュニケーションがとても大事となる競技です。しかし、私は試合中の声かけが聞き取れませんでした。そのため人とぶつかってしまったり、ボールを取りに行くことができなかったりしてしまいました。皆本気で取り組んでいたのに、険悪な雰囲気になってしまつこともありました。試合中だけではなく、普段の練習中でも先生の指示が、ボールのはねる音などにかき消されてしまい、聞き取れないということがありました。ここで私は初めて自分以外の皆の聞こえ方に疑問をもちました。どのくらい聞こえるものなのか友達や先生に質問しました。そうして初めて自分の聴覚障害について深く考えることができたのです。生涯ずっと付きまとう障害についてとても不安に思い、怖いと感じました。そこで当時通っていた聾学校の通級の先生に相談しました。友達に私の障害について話したらどうかと先生から提案がありました。私はその提案を受けて、話すことを決めました。最初は不安でしたが、友達は皆真剣にコミュニケーションがとても大事となる競技です。しかし、私は試合中の声かけが聞き取れませんでした。そのため人とぶつかってしまったり、ボールを取りに行くことができなかったりしてしまいました。皆本気で取り組んでいたのに、険悪な雰囲気になってしまつこともありました。試合中だけではなく、普段の練習中でも先生の指示が、ボールのはねる音などにかき消されてしまい、聞き取れないということがありました。ここで私は初めて自分以外の皆の聞こえ方に疑問をもちました。どのくらい聞こえるものなのか友達や先生に質問しました。そうして初めて自分の聴覚障害について深く考えることができたのです。生涯ずっと付きまとう障害についてとても不安に思い、怖いと感じました。

中学校を卒業し、聾学校の高等部に入学しました。中学校までとは全く異なる環境で過ごすことになりました。聾学校で過ごす中で驚いたことがあります。聾学校では基本的に手話を使って生活をします。先生からの指示も全て手話を交えて出されます。そのため、指示が聞き取れずに動けない状況に陥ることがありませんでした。二人以上の友達と話す時、会話を聞き取れずに私以外の皆で盛り上がりつつも私一人はついていけません。それが、今まで人間関係で悩み、どこか孤独を感じてしまっていた私を慰めてくれたような気がしました。指示を聞いてすぐに動くことができなかったり、皆の会話に入れず孤立してしまつたりして、自分を責めていたけれど、自分のせいではないと聾学校に通うことで気付くことができました。そして、友達や先生とコミュニケーションをとり、自信をつけることができました。一般の学校へ進学し健聴者と過ごしていたら、この得難い経験をすることができなかったと思います。この経験や学びは、大人になっても私を助けてくれるだろうと思えます。

高校生活もあと半年となり、もうすぐ卒業します。聴覚障害をもつことで付きまとう不安は変わらずありますが、声に出して伝えなければ気付いてもらえませんが、声を出せば誰かが気付いて、そっと手を差し出してくれるかもしれません。素直に助けを求められるような人で

ありたいと思います。そして、障害に関係なく、助けてほしいと苦しんでいる人に手を差し出すような人でありたいと思います。